

同窓生シリーズ 40



第30回生 中山久美子さん

上智大学文学部仏文学科卒業  
早稲田大学文学研究科修士(西洋美術史)  
一九九二年より、川崎市市民ミュージアムにグラフィック部門学芸員として勤務。

私は川崎市市民ミュージアムという、美術館、博物館と映像センターから成る複合施設で美術系の学芸員をしております。学芸員という職業は、近年特に女子学生に人気があるようで、志望者も多いのですが、まだまだその実態が広く世間に認知されてはいないと思いますので、この機会に仕事の紹介をさせていただきますと思います。

美術館とは元々、王室等のコレクションを保管し市民に公開するために作られた施設なので、一般に自前のコレクションを持つのが普通になっています。しかし闇雲に作品を集めても混乱するだけですから、どの館でも収集方針を定めており、それが館の活動の特徴を示すものとなっています。例えば川崎市市民ミュージアムでは、漫画や写真、ポスターといった、複製技術を用いて大量に作られ、社会に流布していく作品を収集、展示、研究

していくことを活動の根本に据えています。そのため世界的にもユニークな施設と位置づけられています。収集方針に沿って、予算をやり繰りし、実際にどのような作品を購入したり寄贈を仰ぐかを判断するのが、学芸員の大事な仕事です。集めた作品は大切に保管し後の世に伝えていかなければなりません。劣化を防ぐ処置を施し、適切な温湿度が保たれた保存環境を整えます。この保存の業務には作品を展示したり、展示のために

他施設に貸し出す場合も含まれ、作品の梱包、輸送時の安全、展示環境の整備まで、学芸員は目を光らせます。展覧会場にはよく「作品の保護のため照明を暗くしています」という表示がありますが、強い光も作品を著しく傷めるので、注意しなければなりません。さて、展示の話が出ましたが、収集した作品はおもに常設展示の形で公開されます。常設展示は一般に観客が少ないのが残念ですが、実はその館の活動を明確に示す、館の顔ともいえるべきものです。というのも、その館が何に意義を認めて収集方針を定め、作品研究を行う学芸員が、個々の作品にどのような価値を見出し、歴史上の位置づけを与えているかを示す場であるからです。ただし展示を見ていた、だけ

では作品の重要性が伝わりにくい場合もあります。そのような場合に実際に作品を前にして解説を行うギャラリー・トークや外部の研究者を招いて講演会などを開催することも必要になってきます。これが教育普及活動で、作品の制作講座も含めて多くの美術館が力を入れています。こうした活動の中で実際に話をしたり企画をコーディネートするのも学芸員の仕事になっています。美術館の活動で最も人目につく華やかな部分は特別展や企画展と呼ばれる展覧会でしょう。こうした展覧会は、通常数年前から準備されます。学芸員は日頃の研究をもとに展覧会のコンセプトを練り上げ、出品したい作品のリストを固めていきます。どこの美術館にどんな作品があるか、個

人コレクターがどんな作品を所蔵しているかを地道に調べ、借用の交渉を重ねます。並行して図録のために論文や解説の原稿を執筆し、編集作業を行い、ポスターやチラシといった宣伝物製作の手配もします。展示の図面を引き、展示作業の采配を振り、照明を整え、オープンを迎えます。もちろん一人の学芸員の力で全てを執り行えるわけではなく、庶務や広報に携わる職員の協力を得て実現にこぎつけます。しかし、展覧会を担当する学芸員の負担は相当なもので、最後は体力勝負となります。

結論として、学芸員とは頭脳労働と肉体労働の双方をこなしつつ、借用交渉等では営業力も要求される、まさに総合職なのだと言えるでしょうか。